イスクラNo.12を
発展させよ！

何が必要か

高校のイスクラ
No.49

'61
3/20

社会主義学生同盟（レフト）
京都府委員会高校全日制部

A 始めに

昨年三月始めにイスクラNo.12を発行してから約一年過ぎた。この間にわれ〳〵は多くのことを経験し、又多くのことを知識として獲得した。だが、これらの経験・知識を充分に理論化したかという疑問に対して、われ〳〵はかなりの否定的な解答をしなければならない。

イスクラNo.12が、勤評闘争後の徹底的な崩壊の中から、京都高校生運動と短期間に立ち直りの可能性を与えたことは、多くのこの期間に活動に参加した諸君の認める所である。無論、このイスクラNo.12の中には多くの重要な誤りが含まれている。われ〳〵は一切を否定しまいす気持は少しも持っていない。反対に、現在持ち得る理論のすべてをかたむけて、この誤りを是正しようと努力するであろうし、また、現在の発展段階にマッチする様内容を附与する必要性すら感じている。

イスクラNo.12に対するこれらの努力は、すでに安保闘争の高揚期（五月二十日〜六月二十日）に必要とされていた。不幸にして、われわれはそれに気付かなかった。最近、多くの支部の活動に、重大な欠陥が存在することが、もはや誰の眼にも疑えなくなってきた。この二つが、われ〳〵に新しく前進する様要求している。われ〳〵は、もしも、この様な欠陥を、例えば西京闘争後に感知していたならば、現在以上の前進を誇り得ていたろうことは疑えないことである。だが、この欠陥は、指導部の立ち遅れを非難するかの様に、少数ではあるが、活動の最前線にいた同盟員諸君の手によって、至験的に、或いは暗中模索的に、克服の方向が追求されて来た。必要性が彼らをその方向に押しやっていたのである。われ〳〵は、これらの方向を正当に評価しなければならない。例えば最近の堀川高校の闘争は、同盟員外の諸君の活動による所も多大であるが、その中での同盟員の活動は、恐らく本人が気付いているよりも多くの教訓をわれ〳〵に与えているであろう。

B 総括

われ〳〵は自問する。われ〳〵はこの一年半に渡って何をなし得なかったのか、と。われ〳〵はこの意向に明確な解答を与える必要に迫られている。これこそがわれ〳〵の新しい前進を保障する鍵となるであろうことは、正当にも、多くの同盟員によって認識されようとしている。

われ〳〵の活動の最初の半年、即ち59年9月〜60年2月の間は、革命運動の最も基本的な理論を確立するために費されたのである。それ以上のことは、われ〳〵の未熟さと活動家数の徹底的な不足によって、全く出来得なかったのである。当時、われ〳〵が持ち得た方針は、明確な形では何もなかったと断言しても、そう過言ではない。数校で活動家子めの読書会を持ち、活動家を同盟の影響下に結集させると云うのが方針のほとんどであった。革命運動の最も基本的な理論の確立と云えども、決して充分なものではあり得なかった。

この期間の活動は意味がなかったとの結論は、これらの事実からは少しも出て来ない。反対に、この期間に同盟の周りに結集したメンバー、また特にこの期間に同盟員であったメンバーは、若干の例外的存在を除けば、京都の高校生運動の再建の事業の功労者であり、この高校生運動の上にレフトの地位を確立した人々達であることを考えると、一月二の革命の基本的な理論の確立に力を入れるべきであったとこう結論に到着するのである。

だが、この様な活動は現実の発展に遅れ始めた。高知県の高校生運動はわれ〳〵に大衆的な規模の運動の可能性を示していたし、活動の途上に於て必然的に生徒会の重要性を認識し始めていた。始めは極めて単純であった。シンパを獲得するためには生徒会の執行部に入るのも一つの方法であると考えていたのである。しかし、運動の発展はこの様な単純な思想を打ち壊していった。実際に生徒会執行部に影響を持ち始めるやいなや、たった一校にすぎなかったが、これに対して同盟がどの様な態度で望むかが問題となったのは当然のなり行きである。現実はわれ〳〵に意識としての反映を要求したのである。どの様な態度で望むかの問題について、われ〳〵は三派に分れた。その一分派はイスクラNo.12に書かれた思想を支持し、また一分派は〝政治闘争〟の重要性を主張し前の一分派に〝日和見主義〟のレッテルをはった。他の一分派はこの論争に加わらなかった人々である。

イスクラNo.12に書かれた思想は当時の情勢の中にあって全く正しいものであったとは云えない。むしろ重大な誤謬が含まれているのである。であるのにイスクラNo.12が官僚的に出された後、その様な思想を支持する分派が決定的に勝利していったのはなぜであったか。無論、政治闘争〟の重要性を強調した諸君の思想はかなり正しい面を含んだが、全面的に正しかったとは云えない。ではその誤りは何であったか。この傾向は今まで全くおろそかにされていたが、極めて重要な問題を含んでいる。

イスクラNo.12は実際の活動により具体的な方針を与え得たが、反対派（イスクラNo.12の方が多数派であったようだ）はこれに対して一般的な批判にすぎず、客観的には不平家にすぎなかった。これに勝利と敗北があったのである。前者は具体的な展望を与えるかわりに、〝かならずいつかは政治闘争が起る〟との確信を置き代えて、高校生運動を階級闘争の全体的視野から把握することに失敗していたし、高校生運動を現実を肉体で持って充分に把握していたからである。高知県の高校生運動を実際に見て来て、これを京都に於ても実現しようとして最前線で活動していた人々がこの分派に属していたのに対して、反対派の人々は、大学の受験戦争に追われて活動が出来なかった（丁度受験の前後であった）人々であったので、物事を現実の力量についての適確な判断の上に思考し、具体的な方針にまで反映させることが出来なかったのである。

イスクラNo.12の発行された時期は、同盟員は一斉に出なかった。この様な状態は、決して対民青、対ブントとの関係に於てレフトが劣勢であったことを意味するものではない。ブントは全く影響を持ち得なかったし、民青は徹底的な無能振りを示し何をなすかを全く知り得ない状態にあったからである。つまりでに云っておけば、ブントが影響を持つことは可能であったが努力しなかったのであり、民青は今でもそうであるが、〝トロッキスト狩り〟以外の方針を持ち得なかったし、トロッキストの勢力が小さい時期にはこの方針すら持ち得なかったのである。レフトの勢力の弱さは高校生運動の弱さそのものであり、レフトのメンバーの数の絶対的な不足は活動家数の不足を物語っていたのである。

何も出来たい状態に近い現状をどの様に打解し、高知県の高校生運動の持つ規模の大衆闘争をわれ〳〵の思想の下に組織し得る方向へどの様にして近づけ、これに対して解答を与え得るものは京都の高校生運動を再建する事業の指揮棒を握ることが出来たのである。無論、イスクラNo.12に属する分派に属するものも反対派もこの二つを自覚してはいなかったが

イスクラNo.12の解答の提出に努力した唯一のものであった。しかも、これは現実を打解するために実際に努力していた人々に、一般的ではあれ、方向性を与え得るものであった。現状は、われ〳〵にとっては風靡的でこれある程の非政治的な活動を強いていた。これを抜きにしては、生徒会執行部は一歩も進まなかったのである。われ〳〵はどこにかく動くと云う人々に決定的不足を感じていたのである。自治会にこれを云えば、ボ〳〵ブントをする学生はほとんど居なかったのである。われ〳〵は民青の特許になっているこれらの活動を、屈辱に対する忍耐力でもって行っていた。この現実の活動を自覚要求の闘争の組織へと持って行こうと考え、これを理論化したのがイスクラNo.12である。

イスクラNo.12を支持する者は、反対派を、単なる活動の不充分な点を拡大鏡でもって覗きたてているとしか理解しなかった。反対派が向上を方針として提起しなかったため、実際に影響を持ち得なかったのであるが、その指摘した点はかなり重要な問題であった。約一年たった今日反対派の主張を同盟全体がとりあげようとしているのである。無論、当の反対派に属していたものは、まだこの二つを充分に認識していないわけではないが。

イスクラNo.12が発行されて以後、レフトの主眼は生徒会活動に移って行った。われ〳〵の理論活動は、この事態にマッチしようとして新しい分野に進んで行った。革命の最も基本的な思想は、高校生運動の最も基本的な思想へと具体化されようとした。

この努力は、特に七月頃から、われ〳〵の影響にあるあらゆる社会を使って行われた。イスクラNo.12の思想は、あらゆる社会に、出来る限りの範囲でもって繰り返し〳〵展開された。

しだいに高まる安保斗争の中で、われ〳〵は大きな役割を演じていた。革命の最も基本的な思想を高校生運動の最も基本的な思想への具体化は、五月九日付けのイスクラNo.20〝新聞部の諸君へ――革命的青年の任ムに〟から公的に進められるのであるが、それ以前にすでに一貫として続けられたいわば非公然の時期に於ても、半ば方針と結びつけられていない方法に従って行なわれたのである。なぜ〝半ば方針と結びつけられていない方法に従って〟と主張するかと云えば、それは次の様な意味を含んでいるからである。

われ〳〵がこの時期に、高校生運動の最も基本的な思想を確立しようと決意し、実践の方向に向ったのは正しいし、現実の高校生運動に積極的に参加している人々には緊急に必要なことであった。これなくしては、生徒会、社研、新聞、放送等はその任ムをあきらかにし得なかった。これは必要不可欠の条件であったのである。

だが、高校生運動の最も基本的な思想、例えば、階級社会に於ける高校生及び高校生運動の位置付け・基本的任ム、高校生運動に於て生徒会、社研、新聞、放送のしめる位置等々、の確立は現実の運動を正しく発展させる上での十分条件ではなかったのである。この二つは、再三再四繰り返して述べて来た様に、われ〳〵がこの確立の仕事に方を入れたことと自体を非難に価するものとしているのではない。むしろ、その反対に、われ〳〵の当時の力量からいえばある程度やむを得なかったとも主張するわれ〳〵はあるある程度はやむを得なかったと主張する正当な権利を持っている。なぜならば、この確立のため、当時レフト京都高校部の主要メンバーは他から非難させる余地のない程努力をおしまなかったからである。

上に述べた二つの事柄は、客観的な事態の進行に対して、われ〳〵のこの事業は、原水禁の運動、勤評斗争のなごりをとどめる小ブル思想を払拭し、周りを圧倒的な力量でとりかこむ小ブル思想、例えば京教組を支配する共産党の思想から、自身を確立していくために、われ〳〵がなし得た数倍、いや数十倍の成果を要求していたのである。だが、この事柄は、当時われ〳〵を取りまいていた客観的情勢の中から規定されるプロレタリアートの任ムといかに結合された形で提起されたのかを、この点に対するわれ〳〵の態度は、赤面以外には存在しない。

再び繰り返そう。われ〳〵は京都高校生運動と日本の階級斗争との関係を、実際の行動の方針によって明らかにするのではなく、ヤンアカデミック方向の中で一般的に明らかにし得る所にとどまっていたのである。

誤りはこれにつきるわけではない。これは誤りというよりも不充分さという言葉の方がピッタリするであろうが、この高校生運動の基本的思想はどの様に行動方針にまで具体化されたかと云えば、これは全くおろそかにされていたのである。

ここまで述べてくると、当時まだ活動に参加していなかった人々や、遠方の地にあって京都の高校生運動を、文章と伝聞の如きたよりをもとにして知り得るにとどまっている人々の間に、次の如き疑問が生れ出でよう。

京都の高校生運動はその様な誤りを実際の行動にも反映していたのではないか、と。

確かに有りそうなことであるし、実際にあったのである。

幸か不幸か、京都の高校生運動は安保の混乱の中に突き進んで行った。この混乱はわれ〳〵の誤りをかなり無意識的に修正する役割をはたした。しかし、後で述べる様に根本的な修正とはなり得なかった。なぜならば、われ〳〵はわれ〳〵の誤りそのものを充分に認識していなかったからである。

安保の混乱は、高校生大衆を巨大な政治の渦の中にまき込んでいった。この混乱以前の安保斗争に対するわれ〳〵の方針はイスクラNo.13に於て書かれてあるが、一般的に宣伝を強化せよ、ロング・ホームルームやアセンブリーを通じて討論を組織せよと繰り返す以上に出るものではなかった。しかも、この方針すらが、たとえ指導的メンバーの数名はかなり意識的であったと仮定したとしても、同盟員全体が意識的に高校生運動の基本的思想との関連について十分に明らかにし得ていなかったのは前に述べた通りである。この方針は、混乱以前とは異り、渦中には実際に実行される必要性が生まれた。絶対にオポチュニズムが許されぬ事態に直面したのである。大衆はわれ〳〵が望むと望まぬとにかゝわらず、巨大な波を打って、政治の渦の中へと身を投じて行った。われ〳〵はあらゆる仕事をなげ捨てゝこのなげ捨てゝと云う言葉はわれ〳〵の活動の欠陥を集中的に表現している。即ち前に述べた通り得なかったことを意味しているのだ。この巨大な波の先頭に立とうとして努力した。だが、この混乱の中での大衆斗争は、やっもすると街頭でのデモに終始する方向に進みがちであった。この傾向をいかに阻止し、われ〳〵が常に口にして来た大衆の左翼化をいかにして実現するかの課題がわれ〳〵の前に提起され、その実行が一時の猶余もなくなされるべき状態に直面したのである。もはや、われ〳〵は京都の高校生運動をその狭いワクの中だけで思考することを許されなかった。

かくして、われ〳〵は高校生運動の基本的思想を、客観的情勢によって課せられた基本的任ムからそれを具体化する方針、ないしは今日、明日の方針にまで至る一貫した体系づけられた政治方針の中で具体化し、肉付けしすべき機会にめぐまれたのである。しかし、実際は、われわれが自己の誤りを認識していなかった、また認識し得なかったため、この機会を逃してしまった。

安保斗争のこの高揚は京都高校生運動の再建の事業に決定的な促進的刺激を与えたし、わがレフトの護を大衆の面前で高くかゝげ、その地位を一応強固なものにしたのであるが、この二点については、昨年九月に書かれた〝安保総括〟（出版は最近にようやく実現、これ、内容にかなりの誤謬が含まれているが、無修正で出版された。誤謬については本論文が語る所のものと同じである）にかなり詳しく書かれてあるので、必要な部分だけを簡単にふれるようにしよう。

安保斗争はわれ〳〵に政治的宣伝・煽動の場を与えた。これはわれわれが活動を始めてから始めて直面した本格的な政治的宣伝・煽動を可能にするものであった。政治的な宣伝・煽動は、当然のことではあるが、斗争を大衆の意識向上のための有効な機会としても取らえようとする努力のあらわれであった。しかし、その努力は、その期間を通じての明確な方針の中に位置づけられる必要があった。この点は、斗争の初期に於てすでに未明にいたるあらゆる時期の宣伝・煽動活動をあらかじめ決定しておく様な馬鹿げた行為を意味するものではない。当時、われ〳〵は数校に於て生徒会や社研部等に影響を持っていた。また、大衆斗争の内での生徒会、社研、新聞等がはたすべき一般的な基本的任ム・位置づけはようやくにして理論化されつゝあった。従って、われ〳〵はこの理論を影響下にあるそれぞれの部門に於て実践と結びつけ具体化すべき任ムを持っていたのである。この活動の成功裏に於ける遂行こそが、イスクラNo.12で述べた〝われ〳〵の目指すこゝろのもの――われ〳〵の思想で武装された大衆斗争の組織〟を可能にする組織的基盤を明白な意識性を持って追求するための出発点となり得たであろうことは疑えないことである。

勤評斗争による京都高校生運動の崩壊は、運動に参加する人々の間に徹底的な断絶を作ることによって、運動の技術的な点に於ける断絶をも生んだ。これに対する指導部の経験不足と理論水準の低さは、この断絶が技術的な点によっても起される混乱を完全には救い得るものでなかった。こうした不利な条件の中にあっても、前にわれ〳〵が名付けたところの高校生運動の基本的思想が実践の中で具体化されるべきことを要求していることについて、われ〳〵が明確に認識していたならば、われ〳〵はわれ〳〵の目指すコースの上に意識的に立ち得たであろう。

では、現実の前進は何によってもたらされたか？

客観的情勢はあきらかにブンドに有利であった。一般的な危機感と閉塞感に対する不満の高揚、だがブンドには二つのものが欠けていた。その一つは中核、他の一つはデモをかけるべき目会。後者のかわりに、自民党京都府連の本部の占拠、四条河原町へのスクリ込み、梅小路操作場の信号所の占拠等が考えられたが、とうていこの盛り危機感を作り出すしろものにはなり得なかった。もしも、ブンドが中核を持ち、自民党京都府連の本部が目会などのムードを作り出していたならば、彼らはわれわれを徹底的に圧倒し得たかと云えば、混乱の原中には恐らくそうなったであろう。だが、ブンドは、その本質的な性質から、安保のこの混乱が終るやたや、崩壊の方向に向うことは必然的な成行であったし、技術的にいかなる問題も、いかなる中核の存在もこの必然的な成行を阻止出来なかったであろう。中核は彼等の方針の必然的混乱から明確な教訓を通じ欠くことによって、必然的に弱体化せざるを得なかった。従って、現在実行する結果は、当時ブンドがどの様な行動に出たとしても、本質的に変るところはないであろう。

しかし、ブンドの行動指針は、事態の本質的な進行を変えなかったにしても、本質的なものゝ進行を長期する現象には、大きな影響を及ぼさないわけにはいかないし、その進行の速度そのものにも、一定の限界内にすぎないにしても、影響を及ぼさないわけにはいかなかったであろう。

現実には、ブンドは京都の高校生運動をわれ〳〵の手によって再建するのに対して、あまり大きな影響を加え得なかった。むしろ、安保斗争のこの混乱がレフトのメンバーやレフトのまわりに結集していた諸君を政治的に訓練し、方針が不充分であったので完全な政治的訓練は絶対に望み得なかったし、京都の高校生運動の再建過程に促進的な刺激を与えた度合の方が、このブンドのひっかきまわしよりもはるかに大きかったのである。

京都に日会がなかったことは、ブンドとCPの差を東京ほど明確にはしなかった。もとくブンドとCPは小ブルの持つ性格のこの面を極端化したものにすぎない。危機感を徹底させ、露骨に表現し、急進的に進んだのがブンドであり、危機感を薄れた大衆にも反感をかわない程度にひかえ目に表現したのがCPにすぎない。実際、当時の戦術に表れた両者の差異は、ジグ・ザグ・デモに大衆を強引に引っぱり込むか、大衆にはっぱらわれるジグ・ザグ・デモをやらない整式デモに自らも参加するかの差異以上のものではなかった。

とすれば、CPも大衆の高揚感の上に自己の影響を拡大する絶好のチャンスにめぐまれていたことになる。しかもCPは混乱後も、総選挙に大衆の眼を向けさせることによって、彼らなりの方針を提示それによって感度をうくることが出来た。また教組にかなりの影響力を持ち、これを実がかりとして、高校生の活動家に影響を持つことが可能であったはずである。実際に、京都の高校生運動の中に、この時期以後、主流派と反主流派が公然と対立するようになったのである。それにもかゝわらず、彼等がわれ〳〵が獲得した成果よりも小さいこの混乱以前に、京都の高校生運動を再建するための、また再建を可能にするところの何らの方針も持たなかったこと、混乱以後も、指導に成果をもたらしてどの様に再建を一段促進させるかの方針をも持ち得なかったからである。無論、われ〳〵も充分な方針を持ちあわせていたとは言い難い点は前述べた所である。だが、われ〳〵のイスクラNo.22は彼等の無方針に比べればずっと立派な方針であったのだ。

ブンドもCPも京都の高校生運動を再建すべき、また再建を可能にする方針を全て提示出来なかった所に、前者が崩壊し、後者が反主流派にとどまらざるを得なくなった根本的な原因がある。CPがブンドの道をたどらなかったのは、全くの所、大衆がブルジョア思想・小ブル思想に毒されているおかげであるのだ。

安保混乱期には、指導部は決定的に弱体化していたが、情勢の変化に応じて、当面の活動方針を敏速に提出するための努力は全験的に多少ながらなされた。斗争をわれ〳〵に有利な方向に従って展開するために必要な思想の宣伝は、イスクラ紙上（No.22～27及び号外）とわれわれの影響下にある全組織の力量を総動員して、精力的になされた。

この思想の宣伝は、情勢の変化に応じて、活動方針をも含めた形でなされた。日会やブルジョア民主又義の本質の暴露からジグ・ザグ・デモの意義に至る極めて広範な範囲に渡ってなされ、大衆や活動家の要求に精力的に答えることも編集にあたって考慮された。

われ〳〵が明確な組織的な、また体系立った方針を持たず、一般的な、全験的な方針しか持っていなかったにもかゝわらず、大きく前進したのは、CPやブンドの全くの無方針と、このわれ〳〵の圧倒的な宣伝活動によっているのである。われ〳〵の組織の内に於ても、圧倒的な宣伝活動をたとえ全験的であったとしても情勢の変化に応じて機敏にその変化に答える形でなし得なかった部分は、前進を確実に獲得出来得ていないことからも、この圧倒的な、しかも斗争の過程に於て、必要な時期に必要な内容でもって答えると云う形での思想宣伝が、いかに重要であるかが結論されよう。

安保は終り、次の段階に入る。一学期の期末テスト前後から夏休みの終りまで、同盟は今までの努力の結晶を収穫すべき時期に入る。われわれはイスクラNo.26～No.27を通じてその方向を明らかにすると同時に、全験的にも当然その方向に進んだ。八月の初めに原水禁の世界大会があったので、その時期には、熱気を二分した。原水禁世界大会については、生産物の問題と関係するので、後でふれることにして、ここでは獲得すべき収穫について述べる。

安保の混乱を京都の高校生運動を発展させるために逃してならないチャンスであることについては誰も否定するものはいなかった。デモへの恒常的な参加者が綿密に調査されてあった。混乱期に活動した人々はマークしてあった。この記録をもとにして、オルグ活動が、ミラ、ミラぶしの比喩が当てはまる程の徹底さでなされようとする。無論、すべての分野でなされたわけではない。われ〳〵は京都の高校生運動の再建に最も必要なのは、社会主義革命を志すイクを大量に生みだすことであると云う一般的結論を持っていた。この一般的な結論は、われわれをして徹底したオルグ活動と問題点の急速な教育へと志向させたのである。

この時期の活動は、秋に向けての明確な展望を欠いていたため、実験的ないしは暗中模索的なものにならざるを得なかった。同盟員の急速な増加は、われ〳〵がこれまで積み重ねてきた思想を新しい同盟員に消化させるための努力を要求した。この要求に答えることなくして、秋の展望は、たとえ一般的なものであろうと、現実性を持って語ることは出来なかった。高校生運動の組織が活動家の質的量的発展を越えて拡大していたため、秋には、大問題が必要とされていた。このことは、誰しもが関知する所であった。われ〳〵の秋に対する展望は、われ〳〵がこれまでに獲得してきた高校生運動の基本的な思想を実践すべき願望と新しい同盟員の教育によって予想される同盟の力量の増加の上に立っていた。また、少くとも、総選挙までは大衆斗争を政治的な問題で組織する機会はないと考えていた。

われ〳〵はこゝに於てミスを犯している。少くとも総選挙まで政治的な問題で大衆斗争を組織出来ないと結論した。われ〳〵は常にこの常要求の斗争、学園民主化の斗争を重視していた。われ〳〵は生徒協、各生徒会を本格的に強化することを熱望し、その実現を狂信していたとすれば、生徒協、各生徒会を強化するための日常要求、学園民主化の斗争をわれ〳〵の指導の下に意識的に追求するための準備が、この夏期になされてしかるべきであった。同盟員の教育、オルグ活動はこの準備の中に意識的に位置づけられてしかるべきであった。政府や府教委の教育方針、各学校の非民主的な制度、日常見逃している諸矛盾、大衆の要求についての綿密な検討。校討の上に、これらの持本質についての討論、研究は最優先されなければならない仕事であった。これらの仕事を一種の活動家学習会のような形でなし得ていたならば、秋に生じたような、われ〳〵の混乱は或いは避け得、或いはその度合を弱めることが出来たであろう。

ミスはこれだけにつきない。われ〳〵は京都の高校生運動を現実の階級斗争の中で明確に位置づけ、そこから方針を出していたか？いやそうではない。一般的な階級斗争との関連について云々するにとどまっていた。われ〳〵は、当時、日本の階級斗争の天王山と云われたこ

[illegible]三井三池の闘争に、今までの大一〇〇年間にわたって[illegible]した。[illegible]した後、ブルジョアジーは最後の仕上げをもくろむ所の三井三池のプロレタリアートの[illegible]を[illegible]した。三井三池の指導部の裏切りは、今日か明日かの問題であった。常に、前衛の一員にならんとしていたわれわれは、一体、この日本の階級闘争の天王山を前にして、何をなし得たのか？問題を、たとえ細い行動方針であっても、その階級闘争の態様を明らかにした上で、提起し処理したのか？

これに対して、三井三池は京都より遠き所だけにあるとか、学校は休暇中であるとか云ったいわけは、筋が通っているだろうか？

無論、われわれは客観的に必要とされることをすべて実践せよと主張しているのではない。行動に対して極度に熱心な同志諸君には、この様な極端な言動が時として見られる。だが、その様な主張は、実際の成果を充分に獲得しようとする合理性の探究の前に、自然と是正されていくものである。それにもかかわらず、われわれの主体的力量、条件の範囲内で可能なこの任務を遂行すべき形態をあくまで限りの努力でもって探究すべきであった。この探究を怠る所に、どうして裏切り的行為と非難されぬ正当性が附与されよう？

まず第一に、新しい同盟員の教育、オルグ活動は、一方では一般的な社会主義思想でもってなされるべきであり、他方ではこの三井三池の闘争の綿密な分析でもってなされるべきであった。これは、あたかも数学に於ける公式と実習・応用の関係である。次に、大衆に対して、可能な限り、例えば登校日を利用して、この闘争について詳しく語るべきであった。これにより、日本のプロレタリアートの悲劇の原因をあきらかにし、高校生がみずからこの悲劇を解決する主体として将来プロレタリアートの中に入って行くべきことを訴えるべきであった。第三に、社研、新聞は無論、生徒会執行部も、充分な調査・討論を行い、その上に立って、秋に向けての深い意志統一を行うべきであった。第四に、社研、新聞、生徒会執行部は、三井三池の問題と関連して合理化について全電通、国鉄、全逓等の労働者と交流会を持つべきであった。このことにより、高校生運動と労働者の闘争との結合を、単に[illegible]と云う意味だけではなく、現時点での直接的な交流と云う意味に於て、実現すべき、準備の行動としなければならなかった。等々挙げればかなりの行動が実際に可能であったことが理解されるのである。

秋へ進む。われわれは西京闘争に直面する。われわれの公然たる敗の第二である。第一は安保闘争の混乱期し洛北高校を民青でしめられた事件である。第二番目が西京支部を崩壊に導いたこの西京闘争である。

西京闘争は西京支部を分裂に導き、われわれが少数派になるという事態を生んだが、この事態の出現は、決して西京闘争が突然に生み出したものではない。むしろ、西京闘争内、過去の傾向に対して決定的な促進的役割をはたしたにすぎない。西京支部の分裂は、支部結成当時からすでにその内的要因をはらんでいたし、多くの時期に於てこの内的要因は表面化していたのである。

ここで西京闘争の具体的内容にふれることはしない。支部内部の問題はイスクラ№30、31、32でふれられている。これらのイスクラがふれていない、しかも重要な部分に限って述べよう。それは高校部の指導部の問題である。

まず第一に二の西京支部の闘争以前の傾向に対して指導部はどの様に対処して来たかについて述べなければならない。

二の傾向を指導部は関知していたか？半ば分裂を持ちつつも知っていた。ではその分裂とは何か？この問に答えるためには、イスクラ№20をストックから引き出してくる必要がある。イスクラ№1、№12、№31、五月九日発行・十一月一日再版発行）はイスクラ№20（六〇年№32と共に最も広く、最もしばく読まれ、同盟員及びシンパに大きな影響と指針を与えている。近い将来に於て、数万部の規模に達することが予想されている。この[illegible]イスクラ№20に次の様な言葉が書[illegible]ている。少し長いが引用しよう。

〃高校生の場合、最もプロレタリアに近い、または将来確実にプロレタリアになって行く部分が、最も自己の階級の利害に無関心な部分

を構成している。この二つは決して偶然ではない。日本のプロレタリアートの運動が無方針と混乱によって、次第に後退しつつあり、その反面まで生活が徹底的に破壊されていない現実の姿が、彼らをしてプロレタリアになるものとしての自覚を獲得させ得ないまでにしている。彼らは、そのほとんどが、インテリゲンチャとしての性格に薄い部分に属している。これは彼らの思考方法が、より生活に密接な基盤を持っていることであって、彼らの運動の状態が、彼らの生活を通して彼らの思想に反映していることである。

彼らが最も広範に、最も大胆な勇気を持って、最も強く階級的利害を反映して、社会変革の諸々の事業に参加してくるのは、共産主義者同盟と云うサークルニヒリストの云っている様な一部の先進的部分の教育や一地方サークルの、センセーショナルな行動ではなく、大衆運動、特に労働者階級の新しい形態、または、大衆の新しい尺（特に下部労働者大衆）の自主的な闘争への覚醒だけが可能にするのである。

現在の瞬間、高校生新聞にこれらの本能的に労働者の側に立つ諸君が参加していないのは客観的な事実であり、我々がすでに以前から二の二つを指摘し、高校生大衆の意識変革と云う極めて困難な事業を行っていたならば、プロレタリアートの運動の非劇をこの様な見事な形で高校生の中に反映していると云う事実に多くの変革をもたらし得たことは当然予想される。しかし、我々はこの困難な事業をほんの最近になってから、高校の中で始めたばかりであって、我々は彼らをより明確な、より大胆な形でプロレタリア的な意識の担手に変革していかなければならない。

もしも、将来プロレタリアになることが確実である部分が、頭の先から足の裏まで、プロレタリア的意識を持って、新聞編集（何も新聞に限ったことではなく、高校生運動全般にも云えることだが）に参加してきたならば、五つの政治的グループは必然的に、その背後にある階級的なグループ別をより明確にするであろう。単に遅れた部分と進んだ部分等の不明確な現在のグループ別は、構成員の進もうとしている道に従って、より明確に、より階級的な分類へと発展するであろう。

官僚になるもの――。

高校生新聞が極めてイデオロギー的に不明確であったり、イロハ（五つのグループの前の二つを指している）の観点に立っているものが多いと云うことは、高校生の最も多くの部分を構成している、これらの将来のプロレタリアが自主的参加を勝取り得ていないことの結果であり、そしてそのことが、反作用として、将来のプロレタリアが自主的に参加する者の基盤である彼らの階級的自覚をくもらせているのである。高校生運動全体が大衆的な基盤を十分に持ち得ていない理由は、単なる技術的な問題にあるのではなく、この悪循環に終止符を持ち得ていないところにある。云々。〃

この考えは、単にわれわれが大衆闘争を組織するための準備にあたっての一般的な指針となったばかりではなく、活動家を組織して行くための指針ともなっていた。われわれは〃よりプロレタリア的〃な活動家を組織して行くことが重要であると考えた。また、組織を運営するにあたって、進学する者の活動期間は就職する者のそれよりも短いと云う事実も、われわれをして二の指針をより忠実に実行に移すに至らしめたのである。

京都の高校は小学区制であり、これは多くの都市に於て見られる様に学校の特徴をきわめて鮮明に持つ結果をもたらしている。西京支部の多くのメンバーが他校のメンバーと極めて異った習慣を身につけていたことを、指導部は批判しつつも一つのさういう特殊性として考えていた。彼らの活動に対するその誠実さ――極度の誠実さは絶対に必要であった。なぜならば、われわれは方針の不備さこの極度の誠実さによっておぎなっていたからである。――は、彼らが労働者階級の状態を他校のメンバー以上に反映している結果であって、生活環境から来たこの悪い面もやがて生活の基盤から来るプロレタリアとしての本能によって近い将来に克服されていくであろうとの確信を持っていた。この二つは一般的には正しいと現在も確信しているが、この確信は、この克服のための正しい処置をともなわなかったならば、幻想へと転化する。

指導部は、最も強くなる可能性を持ちながらも、最も弱い状態にある

支部として西京支部を評価していた。この評価は必然的に指導部として西京支部への統制を強化すべき段階へと乗り出させた。従って二の統制の方法に西京支部の以後やかってはいたのである。二の統制は過去の支部活動の総括からなされるべきであった。なぜならば、西京支部は京都の高校生運動再建の過程に於て最も早く立直った支部であり、他校で一名二名とコネクションがつき始めた頃にすでに多くのシンパや半シンパを結集していたにもかかわらず、安保斗争の混乱期に最も動員が少なかったと云う現象が表われていたからである。その動員の少なさは、相対的にどうのこうのと云う程度ではなく、他校の数分の一、数十分の一と云う少なさであった。問題はすでに二の時に表面化していたし、支部の活動は徹底的に破産の寸前であった。

しかるに二の総括を提起することを怠らしめたのはなぜかその理由は三つ存在する。第一は指導部自身西京支部の活動の結果から原因にまで遡のぼる能力を持っていなかったこと、即ちなぜその様な結果が生れたのかについて理解しようにも理解出来なかったことである。第二には、西京支部当時実際に指導していたメンバーに対する一般的な信頼である。他校のメンバーの或者は彼らの同盟からの放逐を要求していたが、指導部は彼らの活動力の古さに対する一般的信頼でもって、これを拒否していたのである。第三には、夏期にメンバーの大量の増加があり、これによってあたかも問題の大半が解決したとの誤った考えが存在していたことである。

われくが短期間に極めて大きな組織を作ったことは一つの弱点を生み出していた。それは思想の宣伝の不充分さも手伝って、指導者と常に接していたメンバーと接していなかったメンバーとの差を極めて大きなものにしていた。西京支部は西京斗争の少し前に指導部が統制を強化する様決意する以前にはほとんど指導部の指導を受けていなかった。

二のことは、支部での活動を極めてデサンなものにし、極めて自由主義的なものにしていた様に思われる。また、革命に対する態度、思考方法等に於てもわれくとは根本的に異っていた。

二ンで再びイスクラ№20から引用した所にもどる。われくが当時将来確実にプロレタリアになる部分に同盟の重心を移す方針を取ったことは、活動の期間の問題も関係して、かなりの実績を上げることが出来た。いまでの高校生運動の指導的メンバーは圧倒的に進学希望者によって示められていた。一方では前に引用した理論的決論から、他方では、工場に一人でも多くすぐれた革命家見習を送り込むために、この傾向に修正を加える必要性について、われくはかなり熟べに考えていた。そして同盟の影響を高校生のどの部分に於てより深く拡大するかについて討論していた。

われくは二の方向を追求するにあたって、無論、大学に進学する人々を軽視はしなかった。大学に進む部分にはすぐれた頭脳を持つ人々が居ると云う事実を絶対に無視することは出来なかったし、同盟の急速な量的発展の中でいかにして質的向上を図かるかは極めてわれわれを悩ましていたからである。短期間で超人的な程の理論的向上を獲得し得る人数が意識的に求められた。これまで理論的な面で第一線に立っていた者はほとんどが浪人生活の状態にあり、同盟は彼らに多くを期待出来なかった。

二の理論的な面を受け持つべき人々の選択は、残念なことにも、失敗してしまった。或同志の表現によれば、"最も指導的な地位に立つべき人が、最も活動から逃げたがっている"と云う状態であった。

それはそうとして、実践活動での指導的メンバーは数例の例外を除いて就職コースの者があたる人事方針が出された。二の人事方針が、前に述べた理由から、西京支部に於て幻想を生ず結果になったのである。

西京斗争の敗北を総括するにあたって、支部は過去の分裂的傾向を徹底的に押しすすめ、以後の方針、特に十月の文化祭に対する方針上の問題は全く支部を二分してしまった。斗争の渦中に指導部と常に連絡を保ち、その方針に従った少数派が、その分裂以後も同盟にとどまり、多数派は、同盟の指導部を官僚主義的であるとして、同盟を去った。

二の西京支部の問題は、確かに西京支部の後の多数派に対する他支部メンバーの批判は公然たるものであったが、決して西京支部に属する者の欠陥に解消してはならない。指導部の指導上の問題としても考えなければならないし、むしろ問題の性質としては二の方が比較にならない程重大である。

西京支部の結成からすでに他支部と異っていた(他支部はほとんど京都府委員会高対の者が直接介入していた)し、それ以後も、西京支部に方針らしい方針はほとんど出していなかった。一れまでに述べられてきた活動は、西京支部についてはほとんどあてはまらない。二うした無方針二そが最大の問題であることは明らかである。

西京斗争以後、同盟は厳しい試錬の前に立たされる。指導部は解散し、新しい人事の下に再出発する。西京斗争は同盟員全体を極度に疲労させた。二の肉体的及び精神的疲労を新しい指導部メンバーは教白の間に克服する必要があった。進学する予定の者は進学をあきらめる方進学を二年遅らせる様要求されていることを自覚し、また就職予定者は大企業への就職をあきらめる必要があった。誰もが暗然に二れを認めあった。新しい指導部は西京支部解散以後すぐに人選が進められた。そして各支部の体制の強化がはかられていった。

二の体制の強化はまずわれくの過去の活動形態の反省から始められた。しかし、問題は根本的な解決にはいたらなかった。なぜならば、当時、まだ西京支部の問題がどこから生れたのかについて明白な形では理解されていなかったからである。われくは気付いた点を、イスクラ№30、31、32、33、34で示れて行った。二の過程は実験主義的なものであった。諸者諸君には再度これらの機関紙を読んでいただくことにして、機関紙に書れていないが重要な点についてのみふれよう。

われくは問題を"個人主義"と"無計画性"の中で考えようとしていた。

社研連のフラク。西京斗争を最も精力的に斗ったのは、西京支部の少数派と社研連フラクであったことは自他認める所である。他支部のメンバーは、特に生徒会執行部に入っていたメンバーは、文化祭との力ケ持ちで忙殺されていた。民青やブンドは全く活動をしないので、レフトのメンバーは支学通りあれもこれもやらねばならない状態にあった。従って西京斗争はほぼ一ケ月間不休不眠の活動を要求した。(ついでながら当の西京支部多数派は、徹底的に、指導部から出された方針をサボタージュしていた。社研連フラクは二の傾向を最も徹底させていたのである。だが、社研連フラクは、残念ながら、活動に最も合理化すべき余地を持っていた。社研連の体制の強化は二の活動の合理化によってなされようとした。

他支部は支部会議、班会議等の実例化によってはかられた。

しかし、二の様な形での体制の強化は、矛盾を解決させる方向に若干進ませたが、根本的な解決とはなり得なかった。なぜならば、問題の把握が不充分であり、その結果解決が至験的な範囲にとどまっていたからである。後でふれるが、生産協フラクに対する対策は多少異っていたのであるが、当時は方針を出した当事者すらその差異には気付いていなかった。

ではどの様にして充分であったか?二れはこれまで述べてきた一連の不充分さと全く同類の正充分であった。

当時指導部はどの様な活動をしていたか?まず第一に各支部の活動の点検である。だが二の点検はどの様な規準の下になすべきかについては分らなかった。明確な方針のない所に点検の規準はあり得なかったのである。二れも当然一般的なものに終始した。

文化祭が終った後、われくの運動の焦点は教育斗争に移って行く。体制の強化は、二の教育斗争の中で明確な方針の下になされるべきであった。しかるにわれくは教育斗争の方針との関連を不明確にしたまゝでなそうとしたのである。

確かに当時われくは次の二ンに気付いていた。"支部の活動がややもすると組織的になれないのを克服するためには、われくの個人の責任を追求することよりも、大衆運動の中で示める生徒会、社研部、新聞部のしめる位置とその任務を明らかにすること に努力されなければならない。組織が一定の方向に従って動き出せば、その様な

問題は大きな困難に直面することなしに解決されるだろう”と。この一つは正しい。ただ、この正しい思想が実践に意識的に取り入れられたかどうかは、否としか答えようがない。

もしもこれが実践されたとすれば、次の様になされたであろう。

まず第一になさねばならなかったのは、教育闘争が階級闘争の中で示める位置・意義についての指導部内での意志統一である。この所は、府委員会機関紙”ソニ”リスト”等で代用したことが指摘されなければならない。第二には、各支部委員会段階の意志統一であり、これに対して指導部の強力な指導がある。そして、新聞・放送班に対してはイスクラ№33とこの闘争の中で具体化するための方針を、社研班に対しては、60年度方針案及び社研連60年度二学期方針案に書いてある社研部の位置付けを具体化する方針を出させる様努力すべきであった。計画、スケジュールは生連協のそれにあわせた生徒会班の活動に従属させる形でその骨子を立てる必要があった。このしたの方針を各班で確認し、綿密なものにすることが必要であった。

この様な原則的なことを充分に消化するには、勤評後の活動の見全な断絶も関係して、少くない時間と絶えまない精力的な活動を必要とするであろうが、とにかく、この方向に向って進まなければならない。だが問題はこれだけにつきない。実際の闘争を起すためには、日常要求、学園民主化の闘争との結合を具体化する必要があった。

むしろ、多くの学校に於ては、この日常要求・学園民主化の闘争自体が教育闘争の内容であり、その様な直接的な関係がないとしても、教育闘争に発展する可能性が充分に存在していたと云えよう。従って教育闘争を闘うにあたって、この日常要求・学園民主化の闘争を教育闘争の中で位置づけ、横へ拡大することによって、政治闘争へと発展させて行くことが必要であったろう。もしも闘争をブルジョアジーの教育政策の問題として正しく把握し、横の連絡を意識的に追求したとすれば、闘争は必ず政治的性質を帯びざるを得ないのである。あらゆる闘争は、常にその中に政治闘争へと発展する可能性を持っているし、その可能性を現実化させる第一歩は、闘争を政治的に把握することである。

こうした観点から日常要求・学園民主化の闘争をとらえ、前に述べた技術的問題を充分にふまえつつ、横の連絡を大衆的に追求することが必要であった。

しかし、現実は、文化祭、中間テスト、高校生の集いの準備と続き、その後期末テスト、休暇に入って行ったと云う様に、実際に闘争を充分に組織する時間がなかったのである。

従って、問題は三学期にむけてどの様に体制を強化し、大衆的に闘争の準備をおこなって行くかにあった。

これに於て、”高校生のつどい”をどの様に位置づけ、どの様にして準備したかについて検討しなければならない。

この検討するにあたって、ここで生連協の問題に触れる必要があるだろう。生連協が大衆の前で活動をし始めたのは原水禁世界大会の時からであった。だが、この原水禁世界大会に向けての方針は、同盟内ではほとんどあきらかにはされていなかった。たゞ他地方の高校生が多く参加し、民青がこれらの高校生を集めて”全高連”を上から結成する方針を提起するとの二コースを手にして、われわれはこれに行入すべき決意をしたのである。そもそも全高連はレフトのメンバーが民青に属していた時代に提起されたものであったが、われわれはその結成について反対であった(イスクラ№29)。なぜならば、生徒会がその機能を発揮しているのは、高知と京都の二府県だけであり、他都府県では極めて不充分であるか、学校当局の御用機関になり下っていたからである。われわれは高知の生連と京都の生連協の連絡会議、大阪、東京二都府その他その他に於て超党派的な生連又は生連協の結成及びこの連絡会議の設立を対案として提出した。民青が”平民協”、ブンドが”民擁協”を中心にして、セクト的に、即ち自分達の派だけで”全高連”を作ろうとしているのに対して、大衆組織を私物化するものと云う観点から反対したのである。

このわれわれの方針を具体化するため、われわれは事前にオルグを派遣し、大会後、高知の代表を京都にまねくこと及び生連協の代表

を高知へ再度派遣することを計画した。高知の代表の上洛は彼らの都合で実現しなかった。また、大阪への介入を決意し、精力的なオルグが進められ、大阪の同志のオルグの仕上げを行った。これが大阪の高校部を確立する一つの力となったのである。

方針は詳しく至要的なものでしかなかったのである。

この原水禁大会以後、生連協内の主流派と反主流派の分裂は明らかになった。われわれは、民青系及び党派に属さぬ活動家をしめ出すことに反対し、少数派には比率以上の役職を割りあてることをした。この割りあてには、決してゴマカシ的なものではなく、重要ポスト上に彼らを入れることをあえて行ったのである。だが民青は、彼らの影響下にある学校を生連協から脱退させ、その一つによって生連協を崩す方針をとった。(イスクラ№37)

CP系の教師の一部のこの反革命行為は、西京闘争の時にわれわれのメンバーを公然と权力側に売ることによって頂点に至った(イスクラ№30、№34、№38)。だがわれわれは、この動きに対処する方向を至験的に取り始めたのは、原水禁大会の総括の中でもなされたのであるが、”高校生のつどい”前後である。

われわれは、この問題を”生連協防衛”の問題として大衆的に暴露すると同時に、CPの拠点への介入の契機としなければならなかった。また、この問題はCP系教師の分裂的傾向を促進させる刺激となり得るものであった。

これを綿密な計画に従って最大限に追求する必要があったのである。しかるに各メンバーの自主性にまかせてしまったのである。

西京闘争を契機にして、生連協を活動する組織とする方向が精力的に追求され、書記局の体制が強調される。書記局員は主流派によって独占される方向が確認され、これは大衆組織の民主々義と反するものではないことも確認された。幹部会での決定が敏速に実践化されるために、この処置は絶対に必要であるからである。そして、この書記局が西京闘争に対する幹部会の決定を忠実に実践する方向が実際に追求されたのである。

西京闘争に対する方針そのものは、各学校で学園民主化闘争を組織すること以上には明らかにされず、生連協の活動は、こゝ一般的な介入にとゞまった。

かく中で、”高校生のつどい”に向けての活動が始められて行く。”高校生のつどい”について述べる前に、さきほど生連協ブラクに対する対策は多少異っていたと書いたが、この二点について述べる必要がある。ではどの様に異っていたのか？即ち生連協ブラクに対する対策は、実際の活動をどの様に進めて行くかの中で、ブラクの確立が云々され、書記局の一員が云々され、幹部会の持ち方が云々されて行ったのである。むろん、この差異は程度の差異であるが、現在この文章が書かれるに至っている原因の一つとしての生連協ブラクの問題提起へ(それからの指導部の欠陥に対するつき上げ)を可能にする一連の過程の出発点となっている。このつきあげは生連協ブラクによってなされなかったとしても、他支部が行うであろう必然性を持ったものであるが、生連協ブラクが最初に行ったことは、単に生連協ブラクのメンバーが同盟の優秀な部分によって構成されていたことによるのではなく、その組織の内的特殊性及びこの至験的ではあり具体的方針の中で組織問題が解決する方向を明らかにしたことが基本的である。ブラクメンバーの精力的な活動等はこれに対して重要な一条件を附加しているにすぎない。化学の言葉で云えば、普通の状態では進行が極めて遅い化学反応を決定的に促進させるための”触媒”であったことになる。

”高校生のつどい”をわれわれはどの様に位置づけ、どの様にして準備してきたか？

われわれは、生連協に対するCPの分裂策動を暴露し、生徒会活動に対するCPの無理解を暴露することによって、われわれの地位と思想を一般の活動家の中で確立するために、また教育闘争を組織する方向を追求するために、この”高校生のつどい”を利用しようとした。こうした観点から、分科会のテーマとして、①高校生々活一般(活動の重要性、活動に対する関心を持つ者を行動の方向へ向けるため——第一分科会)、②教育問題、Eとして教育闘争に関する理論的諸

問題――第二分科会）、③生徒会活動に関する諸問題……第三分科会）が設定された。

二のテーマの不充分さは、教育計画及び日常要求・学園民主化の斗争に関する方針の不充分さの反映であり、本質的に同一のものである。くどく述べるようであるが、問題をより明確にするために、若干たちへって述べることにしよう。

まず第一に指摘しなければならないのは、〝高校生のつどい〟が実践活動と意識的に結合して準備されなかったことである。当時、準備活動に立ち遅れが目立っていたが、これは、むろん生連協書記局の立ち遅れを無視するわけにはいかないが、より本質的な問題としては、単位生徒会が自らの活動と〝高校生のつどい〟との関係を充分に把握し、意思統一し得ていなかったことの反映である。生連協書記局の通達、資料、ポスターの配布が遅れて各執行部に到達したことは、各執行部の取組みを遅らせる結果を生んだのであるが、レフトの影響下にある執行部が生連協待ちの傾向があったことがより重要な問題であり、前者は二の傾向の一現象にすぎない。

ではこの傾向はどの様にして生れたか？生連協がその機能を回復してからまだ日が浅かったからかもしれない。だが、そうであると云った所でわれわれは何も学ぶことが出来ないし、従って前進することも出来ない。避けられなかったにせよ、避けられねばならない。日が浅かったためだと云うことは、結局の所、指導部の指導の欠陥による所が多いと云うことを意味している。この傾向をもたらしたのは、生連協と単位執行部との関係が実際の行動の上で明確にされていず、活動が統一的になされていないところに原因がある。

この二つを別の言葉で表現すれば、単位執行部の活動そのものが〝高校生のつどい〟の必要性を積極的に感じさせない状態にあったと云える。

第二に指摘しなければならないのは、単位執行部の活動そのものが全体的に生連協の活動を必要としていなかったのではなく、常に全体的な視野から物事を見ようとする観点の欠如にその必要性を感じさせない原因があることである。

この様な欠如は、一面に於ては、教育計画及び日常要求・学園民主化の斗争に関する方針の不充分さの反映であり、本質的に同一のものである。そして、その大半は、教育計画の不充分さの反映である。教育計画の発展を志向した学園民主化・日常要求の斗争を執行部がおろそかにしていたならば、三学期に於ては、各高校に於て統一的に二月の斗争を組織して行く大衆的な意思統一の場として、高校生のつどいは位置づけられたであろう。この二つがいかに大切であったかは、三学期の学園民主化・日常要求の斗争を怪かしていた。

三学期の活動については、要約のため書く。

以上の総括はあらゆる点で社会的な影響をもっている。われわれの活動の歴史は、指導部から執行部に至るまで、

C、堀川の斗争

堀川の斗争は同盟の活動の結晶とも言うべきものの一つである。堀川高校への同盟の影響は他校に比べてボトムアップされるだけでなく、その活動の意義が大きかったことは、重要な教訓を含んでいる。

日吉が丘高校にかつては新興高校生運動の拠点校とはなかった。洛北・鴨沂・西京が拠点校であったことは、知られている。現在その中の二校が脱落している。一校は日吉の無能により、他校はわれわれの失敗によっている。現在、運動の中心は日吉が丘に移っている。勤評斗争当時、活動家の間で反動校として知られていたこと。そして現在、来して拠点でもなく、われわれの影響が弱いにもかゝわらず堀川が輝しい勝利を獲得したことは、われわれに重要な教訓を教えている。

この一年間に充分な発展を獲得し得なかった数支部と西京支部との差及び類似はどこにあるかも重要な問題である。なぜこれらの支部の発展は不充分であったか？その中でなぜ西京だけが崩壊したのか？

日吉が丘の驚異的前進は一同志の奇蹟でも魔術でもない。同盟員内でやゝもすると奇蹟・魔術とされがちである秘密の鍵を、堀川の同志

諸君が無意識的に表わすにした。今やそれを理論化し、鍵の大量生産に乗り出すべきである。手工業の時代からオートメーションの時代へと進まなければならない。われわれは、この一年を、京都高校生運動を芸術的な域に到達する作品にまで発展させる一年間としなければならない。

この点で堀川支部からの報告を、多少長文であるが、全文記載することにしよう。

堀川高校生徒大会の意義　▽各資料参照　▽戦術・詳細な経過略

我々の生徒大会への異常なまでの熱意は遂にむくいられた。授業時間に三時間食い込む生徒大会を開くことが出来た。執行部と下部生徒大衆の力強い団結の中でこの輝しい成果を勝取ることが出来た。生徒課〈自治会活動の積極的弾圧機関〉の激しい攻撃の中で、あらゆる日和見主義、冒険主義に反対し、本校自治会未曾有の大巾に授業時間に食い入る大会を開くことができたのは、保守反動の学校側権力に対して〝駆逐会議〟をもゆるがす強烈なパンチを放つことになった。われわれは彼等支配者グループに対して始めて大掛りな反撃を敢行したのである。

若干の経過をふりかえってみるならば――

生徒大会へむけての行動――前後五回開いた中央委員会（うち一回は座談会）、生徒課との大衆的な団体交渉三回、生徒課、執行部合議三回、執行委員会四回、ASSで予備討論会（説明会）二回等、討議三回、合同会議（執行部、社研部、新聞局）二回等。

資料、宣伝プリントは、社研部の機関紙（生徒課バクロ記事）堀川高校新聞第5号（生連協、生徒大会特集）号外（生徒大会戦争――執行委員会）生徒自治会報（大会特集）H・R討議のために No1、ビラ三回等――各資料参照――

以上の様にあらゆる行動と執行部、活動家の献身的な働きでまったく正しい過程をへて大会をもつことが出来た。

われわれが大会前にその意義について次の様に述べた。

「地上執行部が、かつてない大巾な三時間を要求したのは大きな意義がある。今度の生徒大会を動的なものにし、現在の不活発な自治会を建て直さなければならない。又、執行部を強化をつゞける反動生徒課を大衆にバクロし彼等と対決する第一歩にしなければならない。今日までの自治会不活発に対し、代議執行部はたんら具体的対策を組まなかったのである。大胆な対策をもってしかも情勢判断（大量の問題）を誤らず慎重に考えて執行部は活発な自治会活動の活発化をかち取る必要がある。その意味からも生徒大会は特別時間に食い込む大巾な時間を確保し非常に重要な試験である。生連協活動報告、方針に対してじっくり討論し具体化せよ！また執行部は二つの大会を動的に成功させるために、自治会活動の基調となるH・R問題についても対策をねり、生徒大衆を自治会とし、かり結びつけて活動を促進させよう！」

一月二十二日、午前十時より講堂に三年生を集めて一・二年生一〇〇名が大会に結集、盛況で熱烈な討論がかわされた。執行委員長はメッセージの中で「我々は現実の矛盾に対して目をつむらず、みんなで考え、みんなで変革していこう」と力強くあいさつ。校長のおくびようなメッセージと対照的であった。

自治会活動報告、方針が採択され、生徒総力、憲章案の思想生徒課は討論の中でバクロされ、ヨリ・R のありたいの討論では、「学校側はロンガボームルームに一切の介入をするな」という一中央委員の提案があり、大会の名でもって要求する。文を大会、又、生連協提案は「安保斗争」「西京斗争」の討論が中心になり安保斗争は社研に任すのではなく生徒自治会として活動すべきであるという意見が下部生徒大衆より提起され、若干の討論、西京斗争については、戦術の問題をのぞいて基本的には大会としては全面的に賛成された。

大会宣言を満場一致で可決。成功のうちに幕。

われわれはあくまでも非常に[illegible]

われわれは[illegible]

した。

一九六一・二・二二生徒大会

――さらに前進せよ！

この報告で明白な様に、この闘争の特徴は、宣伝活動・意志統一がかなり綿密になされていることである。ビラ等を検討すると、L・H・Rやアセンブリーによるタイミングを合わせて出されていることが分る。新聞部・生徒会がよくこれらの会議・討論会に資料を提供している。L・HRにしても、例えば二月二十一日の場合、二年生は十二クラス中十一クラス、一年生は十二クラス中七クラス成功している。然るに二十三日にクラス討論の出来なかった一年生のクラスの代表を招集して意志統一がなされている。

物事をはじめにあたって、どれほど深くなされたかは分らないが、常に意志統一が計まる部分から統一して行き、これを全体に波及させるために必要な会議、宣伝がいろいろな形態で追求されている。

その他注目すべき点では、新聞部が堀川高校新聞第号を発行した所、記事がわれわれの思想を反映した内容でうずめられているのに対して生徒課が検閲・弾圧を行なおうとしたが、新聞部はこの生徒課の動きに対して拡大局員会議を開き、自行体制をとっている。

われわれは常に堀川高校に於て、生徒課の戒厳令下にある生徒会、社研部・新聞部等の反戒厳令闘争を起す必要性を強調して来たが、ほとんどこの闘争を組織する試みはなされて来なかった。今や部分的ではあるが、自行体制の方向を追求された形で、この戒厳令への意識的反抗が試みられようとしているのである。生徒大会に於ても、生徒課の反動性が暴露され決議される所にまで至ったのである。

堀川の闘争が勝利した鍵の内容は簡単である。それはより多くの人々を一つの目的に向かって動かすための綿密な具体的な方針である。だがこれを実行することは極めて困難であり、極めてむつかしいことである。なぜならば、この実行にあたっては、高校生運動につきまとう種々の要件を乗り越える決意とこの決意の上に立った極めて精力的な活動が要求されるからであり、動員闘争による活動家のほゞ完全な動員が技術的な点での伝統を全くと云っていゝほど後の活動家に伝えられていない状態を作り出しているからである。後者のことを証明するいろいろくの初期のエピソードの中に、ビラを撒くことは問題を大衆に知らせるに都合のいゝ手段であると現在では中心メンバーである或る人に教えたと云うのがある程である。

では堀川の闘争には何が欠けていたか？高校部LC会議へ闘争に参加した同志が報告した中にすでにこの点もふれられていたのであるが、その同志の言葉に従えば次のことである。(1)日常要求闘争を政治闘争への観点が欠けていた。(2)生運協の問題よりもH・Rの問題が重視された（大衆の要求に従って）。

これを検討してみよう。

日常要求から政治闘争へと云う観点の欠如とは具体的に云えば何を意味するのか？この問題に答えるためには、当時の状況の中で、その闘争が直接的に政治闘争へ発展する可能性はあったのかを検討する必要がある。

教育闘争を中心とする学園内の闘争にとゞまるのではなく、教育労働者・学生の権利拡大・教育労働者、学生の全落生活擁護等の、各学園内の諸問題を統一的に表現した形での全国的な闘争として組織するためには、現在の段階に於ては、大学生の全国闘争が絶対に必要とされる。高校生の全国組織は存在しないし、闘争を大衆的な基盤の上に立って組織し得る条件を持っているのは、高知と京都だけである。その京都に於ても、生徒会はまだ弱体であると云わざるを得ない。高校生が他の強力な援助なくして政治的な闘争を組織することは不可能である。むしろ、他の組織の政治闘争を高校生の立場から援助することが可能であるにすぎない。他の強力な援助、教組の強力な援助はどうか？望み得ると主張する者は教組の実情を知らぬ者だけである。京都の教組は救い難い無気力の中にある。

われわれが頼みの綱としている大学生は休暇又はテストの際中にあり、全学連はブント・CPの私有権利感の対象として中枢神経麻痺状態にあった。

この様な状態の中にあっては、堀川の闘争が直接政治闘争へ発展する可能性は全くなかったと断定せざるを得ない。

では日常要求から政治闘争へと云う観点の欠如とはなにを意味しているのであろうか。これは展望の問題である。この闘争の中で、いかにして将来の政治闘争を有効に組織するための準備がなされて行ったかの問題である。闘争の際に発行された諸宣伝紙・ビラ等を検討する所からこの問題について考えてみよう。

この問題を社会問題と切り離した形で宣伝されたかと云えば、決してそうではない。ほとんどの資料が、貧労働と資本の問題、高校生がその中でしめる位置、教育問題（教育内容、教育制度等）、八共料金値上げの問題等について、部分的な説明や不充分な点は存在するとしても、かなりよく宣伝している。その他、生運協の方針（われわれの思想に基いて立てられている）の発行、京新聞の反動的転換にも部分的にふれられている。資料に於て、決して力量を大きくたまわった規模であるとは云えない。

然るに、前記の欠陥が指摘されるとすれば、具体的には何を欠いていたのであろうかそれは、この闘争と将来の政治闘争とを結ぶ方針である。ではこの方針はどの様なものでなければならないか？

この方針案としの方針はこの形態で提出される。その一つは但ワ人に対するものとして、即ちわれわれが日常オルグを呼んでいる形態として、他の一つは、一定の部分に普遍化された形態としてである。前者は後者の上に立ってのみ明確にされるはずであるのに、通常この後者は極めて急られている傾向が強い。イスクラNo.12は将しくこの後者を明確にする試みの第一歩になっている。

堀川の場合、前に述べたイスクラNo.12の欠陥を充分にふまえた上で次の様にイスクラNo.12を具体化する必要があった。

(1)闘争の展望を明らかにすること。(2)この闘争が直接政治闘争へ発展させ得る基盤があるか否か、(3)労働運動その他の運動との直接的な結合が可能であるか否か、(4)もしこれらの直接的な発展、結合が可能でない場合、これらが可能でない理由を明確にすること。

(1)客観的情勢の中で、プロレタリアートとブルジョアジーの対決がどの様に準備されつゝあり、近い将来にどの様な形でこの対決が表面化するかを明らかにすること。即ち、春闘、ILOに関連する諸反動、治安立法、農業基本法改悪、教育制度の変更等。

(2)こうした対決の中でプルジョアジーの手によってどの様に高校生の利益がそこなわれようとしているかについて明らかにする。

(3)この対決時に、高校生は何をなさねばならないか、どの様にしてプロレタリアートと手を結ばねばならないかについて明らかにする。

(1)そのために現在組織されているどの様に準備するべきかについて明らかにする。(2)高校生運動に於ける生徒会、社研、新聞、放送等の位置付け、(3)実際に生徒会を主軸にした運動を組織するために必要な社研、新聞、放送等の権利をこの生徒会の権利拡大の闘争の中でどの様に拡大して行くかについて、(4)クラス活動家の意義とその養成についての諸方針を徹底させる。例えば執行委員会、中央委員会、評議委員会等を拡大会議の形で持つこと、クラス代表者会議、活動家会議等を持つなど、(5)クラス委員を通じての執行委員会のクラス指導等も必要である。

(4)労組との交流、他校との交流についての意義とプランを明らかにする。

堀川の闘争の際中に行なわれた諸戦術は、こうした体系立った形でのカケ案しの方針が部分的に実践されたことを明らかにするが、将しく部分的であったこと、全体主義的なワクにとゞまっていることを証明しているのである。

次に一番目の生運協問題よりもH・Rの問題に比重がかたよすぎたことについて検討してみよう。執行部発行の〃H・R討議のために〃No.2（生徒大会議事録）を読むと、確かに生運協の問題は約一時間説明、討論されているが、全学共、反全学共の問題等が極めて表面的に質疑応答されているにとゞまっている。生運協の必要性が客観的情勢の中で京都の高校生と課題と結合された形で解明される

ことはほとんどなされていない。これは、無論、堀川高校生徒自治会執行部や堀川高校支部の問題と云うよりも、同盟指導部の問題であり、ここでの検討は同盟指導部の欠陥を堀川高校で表われた現象を通じて検討しているのであるが、生徒会執行部の"生徒自治会報"No7に生連協について述べられているが、生連協が運動の発展途上に於て絶対に不可欠であると云う形での宣伝、説明がなされていない。

結局の所、生連協についての討論と生連協の方針について行なわれる様執行部が指導し得なかったのは、日常要求・学園民主化の斗争と政治斗争との関連についての完全な把握が執行部内でなされていないことに原因がある。この関連を、情勢の中で位置づけたりの斗争に具体化された形で把握されたならば、生連協の問題が急ぐべき結果には絶対になり得なかったであろう。

日吉が丘高校執行部がBOX問題で充分な体制が取り得なかったのは、指導者の卒業をひかえ新しい指導者が指導あたったことによって、より多くの人々を一つの目的に向かって動かすための綿密な方針が欠如したことである。だが、日吉の場合、新しい活動家をこの斗争の中で組織し得たのは、将しく日常要求・学園民主化の斗争と政治斗争との関係、高校生運動の位置づけ、各クラブの位置づけを、極めて原理論的な形にとゞまっているが、かなり宣伝、討論等を通じて論じられている所にある。この二つは堀川が、斗争内勝利したが活動家は生れないと云う状態にあるのと対照的である。

日吉の諸君は堀川の諸君を学ばなければならない。堀川の諸君は日吉の諸君を学ばなければならない。

D 日吉が丘の斗争

日吉の斗争により多くの人々を動かす方針が欠如していたと云う結論を報告・宣伝紙、ビラにもとづいて検討してみよう。

まず問題になるのは、二月十九日の生徒大会の出席者数が三〇〇名であったことである。この出席者数が少いと云うことは、H・RやアセンブリーのPTAの持方に問題がある。

日吉の場合、ほとんどの集合、例えば非政治的無色の集合でさえ、集りが悪く、300～400ぐらいである。従って、この大会の300名はさほど少いと云う感じを執行部は持っていない。

だが、今度の斗争の目標は堀川の場合とは異り、かなり高度なものになっている。従って、かなりの大衆の盛上りを必要とする。普通の集合が300であるならば、この数を600、700と云う規模に持って行くことが絶対に必要であり、これこそが学校当局に対する強力な圧力となったであろう。

斗争を大衆的な規模に拡大するために、生徒大会は絶対に必要である。だが、この生徒大会は、特に斗争を自分達の力で作り上げて行く場合に強調されなければならないが、かなりの長期の準備活動にさゝえられた、一つの活動全体の集約とされなければならない。実際日吉の場合、一週間前に生徒大会を持つことを決定している。少くともその倍以上の準備期間を必要とする。また、生徒大会は五時限目に開かれているが、堀川の場合の如く、授業時間に食込む二時間以上の生徒大会を獲得する斗争をもからませて、二時間以上の生徒大会を獲得し得る方向を追求する必要があった。一週間の準備期間だとH・R、アセンブリーがおのゝく一度ずつしかない。これでは二の生徒大会を持つ意義を徹底させ得るかは疑問である。

生徒大会が活動の集約として位置づけられなかった他の証拠として、生徒大会の持つ意義の宣伝が極めて弱い。ビラ、代議紙の内容がBOX等の斗争の目的、斗争の意義等及び経過にほとんどしぼられていて、斗争の形態、戦術に関する記事が決定的に不足している。

無論、斗争の形態、戦術にすべてを解消すると、西京支部の元メンバーの犯した誤りに落入る危険があるが、斗争の意義、展望を充分にふまえた上で、こうした問題を重視する必要がある。

H・RやアセンブリーをP長期の討論の中に位置づけ（急激な情勢の変化・進展があった場合は別であるが）、斗争の形態・戦術をも含めた形で、大衆がどの様に自主的に参加したらよいかを常に明らかにする必要があった。

ここでこうした方法が生徒大会の持方に問題があることを暗示している。

日吉の場合、集りが悪く、300～400ぐらいである。従って、この大会の300名はさほど少いと云う感じを執行部は持っていない。

だが、今度の斗争の目標は堀川の場合とは異り、かなり高度なものになっている。従って、かなりの大衆の盛上りを必要とする。普通の集合が300であるならば、この数を600、700と云う規模に持って行くことが絶対に必要であり、これこそが学校当局に対する強力な圧力となったであろう。

斗争を大衆的な規模に拡大するために、生徒大会は絶対に必要である。だが、この生徒大会は、特に斗争を自分達の力で作り上げて行く場合に強調されなければならないが、かなりの長期の準備活動にさゝえられた、一つの活動全体の集約とされなければならない。実際日吉の場合、一週間前に生徒大会を持つことを決定している。少くともその倍以上の準備期間を必要とする。また、生徒大会は五時限目に開かれているが、堀川の場合の如く、授業時間に食込む二時間以上の生徒大会を獲得する斗争をもからませて、二時間以上の生徒大会を獲得し得る方向を追求する必要があった。一週間の準備期間だとH・R、アセンブリーがおのゝく一度ずつしかない。これでは二の生徒大会を持つ意義を徹底させ得るかは疑問である。

生徒大会が活動の集約として位置づけられなかった他の証拠として、生徒大会の持つ意義の宣伝が極めて弱い。ビラ、代議紙の内容がBOX等の斗争の目的、斗争の意義等及び経過にほとんどしぼられていて、斗争の形態、戦術に関する記事が決定的に不足している。

無論、斗争の形態、戦術にすべてを解消すると、西京支部の元メンバーの犯した誤りに落入る危険があるが、斗争の意義、展望を充分にふまえた上で、こうした問題を重視する必要がある。

H・RやアセンブリーをP長期の討論の中に位置づけ（急激な情勢の変化・進展があった場合は別であるが）、斗争の形態・戦術をも含めた形で、大衆がどの様に自主的に参加したらよいかを常に明らかにする必要があった。

こうしたビラ、代議紙の内容がマンネリ化した最大の原因がある。

以上から日吉の斗争の欠陥が明白になった様に思われる。

だがこの斗争の持つすぐれた点は、代議紙、ビラ、学園民主化、校外問題、例えば日鉄運賃等の大衆収奪、春斗等についてよく宣伝され、討論し確認、意志統一しているこゝである。

この点は堀川の斗争の欠く所である。

他支部は日吉と堀川を学ぶ必要がある。

所で堀川の斗争と日吉の斗争との結合は不可能であったであろうか。斗争目標が異っているので、大衆的な交流はほとんど不可能であると云っていゝほど困難である。だが執行部段階の交流を生連協を通じて行う必要があった。このことにより、日吉の執行部の高い意識を堀川の執行部に反映させ、堀川の長所を日吉が取り入れることが可能になったかも知れない。だが、これが出来ないとしても、生連協の必要性が堀川の執行部へ体験を通じて許り得る第一歩となり得たであろう。

E 社研連

社会科学研究部連合は約一年ほど前から、日支部のメンバー諸君の努力により、一応の再建をみるに至った。

この一年間の活動は総括すべき点が多いが、これらをまとめた形で試みよう。

社研部の活動は、京都高校生運動の発展段階に応じて二つの時期に分類される。その一つは、生徒会強化のための基盤として活動した時期であり、他の一つは、人数の多くが生徒会に非難された時期である。

初期的な時期に於ては、これまでわれわれ〈が再三、再四指摘して来た様に、極めて少数のわれわれ〈が努力を拡大するために社研部へ加入

ないしは再建に努力したことは当然のことである。それは次の理由からである。(i)われわれ自身が活動するに必要な基本的な思想を体得する必要性、(ii)われわれとは別の過程を通じて社会主義に興味を持ち始めている人々を比較的容易に結集することが出来る。(iii)われわれはまだ生徒会執行部に於て少数派でありながら他の人々にわれわれの思想を実践させて行く能力を持ち得ていた。

次の時期は将しくわれわれが大衆的な規模での運動を組織する方向に進み始めた時期である。社研部の多くの人材が、執行部に派遣され、また・むろん、この二つの時期の移行は各学校に於て活動の進展状況に応じて異っているが。

この移行があれ二れの学校に於て徐々に開始されはじめていた時期にわれわれは日支部のメンバー諸君の努力を受け継いで社研連の強化に乗り出したのである。

十一月頃から指導的メンバーの中で、社研連は現在の段階に於ては充分な意義を持ち得ぬのではないかと云う意見が出始め、一月頃には多くの人々の意見となったため、社研連ブロックは活動の重点を単位社研の方へ移すことを行った。このことは社研連強化の方針に重大な欠陥があったことを示している。

ではどの様な欠陥が存在したであろうか。

まず社研連強化にあたって、社研部の高校生運動に於ける位置づけ、従って社研連のそれを充分に把握した上で、一定のイメージに従った展望を持たなかったことが指摘される。

次に二の欠陥の当然の結果として、再建・強化の時期を誤ったことが指摘される。

これを説明しよう。

社研部の位置付けはレフト高校部60年度方針案・60年度の学朝社研運方針案に書れている。また、イスクラ紙上なりしは新しく発行を予定している理論機関誌上に近々記載する予定であるが、二つに簡単にまとめておく。

高校生運動の主軸は生徒会でなければならない。なぜならば、生徒会は生徒大衆を組織した組織であり、その執行部に、大衆のはかれ民主的中央集権制により選出され、しかも、クラブ、サークルに対する民主的統括をも行っているからである。社研部はこの生徒会活動に対して方向性を与える大衆的サークルである。

社研連の基本的任務は、この単位社研に対して理論的な面及びその任務を実践するに関した諸問題の指導である。

従って、われわれはこの任務を遂行するに堪え得る人々を社研連に送り、京都高校生運動の最も理論的ブレインを結集すべきであった。民青に対しても、彼らの理論的ブレインの参加を要請すべきであった。

この様なことは当時可能であったから、無論、可能であるはずはなかった。優秀なカードル女社研連に送る様努力したが、何つのメンバーの相対的な優秀性問題になり得なかった。全体の理論的水準の低さ、人材の絶対的不足へ生徒会執行部への派遣がこれに一段の拍車をかけた)等が不可能にしていたのである。

社研連の活動が意義を持ち得なかった理由は将しそこに存在しているのである。

社研連の活動の失敗はわれわれに多くの犠牲を強いている。不可能に近い活動を社研連が追求したため、強くなるべき数校が、人手不足から充分に前進し得なかったという事実がわれわれの眼前によこたわっている。

社研連がわれわれが到達し得ている理論に従って再び動き始めるならば、京都の高校生運動はより正確な展望を持つことが可能になるであろう。社研連は情勢についての綿密な調査、分析を主要な任務とし、生連協が活動を遂行するに必要な情勢に関する一切の調査、その理論的分析を任務とするであろう。また、その規模を拡大し得るならば、一般的な理論問題をも解明することにより、高校生運動に裏付ける理論を与えることになるであろう。

われわれはこの様な形での社研連を確立するために努力しなければならない。これを可能にするのは、豊富な校と高い理論水準である。

単位社研、執行部の強化の中で、この基盤を全員の自覚の下に早急に作る様努力する必要がある。

F まとめ

結論としてわれわれの今迄の活動が極めて経験主義的なものであったと云うことが云える。運動の発展の度合に比して、理論、方針が常に遅れを取っていたのである。

今までの文章の中で方針をどの様に立てるべきかについてはかなりふれられている。従って、ここではこの方針を立てる場合に特に注意すべき点を二、三述べることにとどめよう。

まずわれに明らかにしなければならないのは、全体の中で置かれている自分達の位置である。この位置付は単なる現在の時点でのものではなく、過去から未来に向けての中に於て動的に把握されなければならない。

この点はどの様に把握されるのか。

この把握は、長期に渡る一般的な高校生の位置、即ち、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級的対立の中で示める高校生運動の位置づけを明らかにすることによって、また二の長期に渡る位置づけの上に立って、現在どの様に階級対立が展開され、発展しようとしているかと云う短期的な客観的情勢の中での位置付けを明らかにすることによってなされなければならない。

この全体的視野からの問題の把握は、われわれの運動に方向性を与え、常に階級的観点から見ることを可能にならしめる。

前者はいわば高校生運動の本質に関する把握であり、後者は、その現情勢に於ける論理的具体化であり、応用である。前者を把握することによって後者が解明され、また後者の解明は前者をこそ確固たらしめる。

この二つの相関係した把握は、高校生運動の任務を明らかにする。

この任務は、階級闘争の焦点へ、大衆的規模の運動を持って、直接的に、或いは日常要求闘争等を組織してゆくと階級闘争の焦点との結合を追求すると云った云わば迂回的に、介入して行くと云う形態を取る。

現在の高校生運動の力量を考えると、例えば安保闘争の如き特別な事態の出現以外には、直接的な介入は不可能である。例えば、公労協の春闘が階級闘争の焦点として大きく浮び上って来ているが、これを支援する闘争をそのものズバリの形で組織することは極めて困難であり、むしろ危険でさえある。日常要求、学園民主化闘争、人事異動に関する闘争等を組織する過程で、公労協の春闘との関連を明らかにすることによって、また公労協の春闘に関する諸問題を大衆的に宣伝することによって、闘争の結合を追求すると云った形態を採用しなければならない。三月三十一日の公労協のストに対する支援の体制をこうした日常要求、学園民主化闘争を組織する準備へ休暇で大衆が居ないので準備)の中で作って行く、また三L0関係の闘争の準備も、客観的情勢把握の中で展望を明らかにする中で明らかにしなければならない。

この様な基本的な点での確認の上に立って、この闘争を実際に組織して行くための組織方針を確立しなければならない。

この組織方針を確立するためにはまず次のことを確認しなければならない。

生徒会執行部、社研、新聞、放送等の高校生運動に於ける位置付けである。これについては、すでにイスクラ紙上で確認されて来ている。この確認は全同盟員のものとならなければならない。また執行部、社研、新聞、放送等に結集する活動家諸君によく浸透する様に努力しなければならない。

この確認は、それぞれの部門に於ける任務の分担と、活動の統一、計画性を活動全体に附与する。

日吉の闘争の時、執行部が意志統一の不充分から一定の期間混乱したことがあった。この原因を調査する時、執行部の混乱にもかゝわらず、社研部の活動はスムースに行ったとの発言があった。これは誤りである。執行部の活動の混乱にもかゝわらず社研部の活動がスムースに行くことは有り得ない。社研部の活動と執行部の活動が分断されていたことを示している。社研部は新しい情勢の中で常にその変化

た理論的に解明して行かねばならないにもかゝわらず、執行部の停滞は社研部としてその理論宣伝の内容を一般化させ、マンネリ化させる。社研部の機関紙、宣伝ビラに関する調査はこのことを裏付けている。それぐゝの部所の位置付けを明らかにした上に立って、執行部は、それに必要な戦術、組織方針を確立しなければならない。そして、社研部、放送は、この執行部の具体的な方針に歩調を合せた形でそれぐゝ戦術、組織方針を確立して行くことが必要である。

支部活動の諸問題も、こうした立体的な方針の確立、実践の中で解決されなければならない。例えば組織的な活動の必要性についても、この方針を確立し実践して行く過程に於て絶対に必要であることを全その中に確認させる様に、指導者は配慮しなければならない。あれこれの側面を他の視点から直ちの判断にかけてはならない。感情、感覚によって判断すれば、至愛主義に必然的に転落するし、科学性を失うことになる。

各支部は、日常、場所の諸事をよく検討し、活動の一歩の前進を勝取れ！

革命家としての
自己の主体性確立
のために！

必読書！
プレハーノフ著
「歴史に於ける個人の役割」
解説

近刊！
待て！

理論機関誌
〝野火〟創刊号
近刊！